

まえがき

動物で美学の研究などという、ずいぶん酔狂な研究だと思われる。実際、ある週刊誌の「天才博士の異常な愛情」という企画で筆者が取りあげられたこともある。筆者は自分のことを天才だとは思っていないが、異常な愛情も持ちあわせていないつもりだ。心理学の研究室に40年間いたののだが、研究をはじめた当初、動物を使った心理学の研究は相当変わった研究だと思われていた。以来、ことあるごとに、「人間のことを知るためには人間のことだけ研究してはダメで、他の動物と比較することで初めて人間の特性がわかる」と主張してきた。現在では、「比較認知科学」（異なる動物の認知能力を比較して認知能力がどのように進化してきたかを明らかにする学問）は学問分野の分類の正式名称にもなっているし、少なくとも認知能力については、動物との比較研究が学問領域として定着してきた。よろこばしいことである。

しかし、「美」となると話は別で、ネズミやハトに絵画を見せているという、まずなんのためにそのような突飛な研究をしているのかわかってもらえない。なんといっても「美」は高尚なものであるから、鳥や獣とは結びつかない。もちろん、人間の素晴らしい芸術が文化的産物であることに異論はない。しかし、私たちの美意識の基礎にはやはり進化的な基盤がある。この本は、ヒトの美や芸術の特徴を、動物との比較によって明らかにしようとするものである。

2012年にフランスで、「性選択としての美」という、生物学者ばかりでなく哲学者まで幅広い分野の研究者を集めた国際シンポジ

ウムが開かれた。招待状をもらったとき、おもしろそうだとは思ったが、うまく話が噛みあうかちょっと心配だった。しかし、ナンテル大学（パリ第10大学）でのシンポジウムは活発で楽しいものであった。美というものの起源を進化から考えるという試みは筆者の孤独な作業ではなく、いまや世界的にもその萌芽が見られていることを実感した。その成果は *Current perspectives on sexual selection*¹⁾ として出版されており、この本を書くときの基礎となった。

なおこの本では、美はもっぱらなにかを見たり聞いたりしたときに感じる経験を指している。一方、芸術は美をつくりだすヒトや動物の活動のことを指している。

筆者はこれまでに動物を使った美学の実験をかなりの数報告し、使った動物もサカナから鳥類、哺乳類にまで及んでいる。それらの研究をまとめたものとしては *Emotion of animals and humans*²⁾ の章として書いたものがあるし、日本語の本でも何回か部分的に取りあげているが、1冊の本としてまとめたものはない。美はもちろん哲学的な課題であろうが、比較認知科学が挑戦すべき課題でもある。動物実験も神経科学も美を研究の射程に入れつつあり、美学は懐手をして考えるだけの研究ではなくなりつつある。この本では美の起源として進化を考える立場の最前線を伝え、そこから逆にヒトの美の特殊性に光をあてることを目指している。共立スマートセレクションのシリーズからは、本書に続き『神経美学の挑戦』（石津智大 著）、『人は踊る、動物も踊る』（山本絵里子 著）が発行される予定である。あわせてお読みいただければ美についての理解が一層深まると思う。